

葡萄の香



日本基督教団
酒田教会

〒998-0037
酒田市日吉町
1-1-7
TEL 0234-22-1224
牧師 塚本恭子

幼子を腕に抱き、神をたたえる

牧師 塚本恭子

聖書 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」

ルカによる福音書2章28〜32節

人生を振り返り思うことは、苦しかったこと多く、楽しかったことが少なかったように感じる。人生とはそう楽な事ばかりがあるわけではない。

万葉歌人の中で最も偉大な山上憶良が、人生の憐れを歌っている。

「世の中のすべなきものは、年月は流がる如し、取り続き追ひ来るものは、百種(も

もくさ)に攻め寄せ来る」

この歌は、この世の中のどうしようも無いものは、年月は流れてである。年月は流れるごとくに過ぎていく、本当にどうしようもない。そして、この時の流れと共に、途切れも無く後から追っかけてくるものは、老い、これはいろんな仕方でも迫り寄ってくるという。私たちの時間は、山上憶良の言うように「すべなきもの」、「どうしようの無いもの」である。私たちが「時よ、とまって欲しい」と思っても、関係なく永遠に時は刻まれ流れて去っていく。それゆえに、私たちの生活は時間に追われて一日が過ぎていく。その時が過去となり人生は過ぎ去る。ある時は、喜び、幸福、ある時は艱難、苦難、病、絶望。そして容赦なく時の流れは私たちを老いへと迫る。その時の流れの中で罪の深さに思い悩む。しかし、どう足掻こうと時は過ぎ、私たちの一生は終わる。

私は牧師としてのこの世の現実と永遠が織り成す縄目の中の教会で生きていることを自覚している。教会は世俗に捉われるこ

となく、新しい今を、現在に生きることが出来る。それが神の前に生きる私たちの道であって、今を明日に向って、神の示される道を希望に歩む。今日という日を感じて自分が「ある、存在すること」に喜びをもって祈りつつ歩む。それが神と共にあることで、信仰に生きることである。なぜなら私たちのすべての罪がキリストによって赦されているので、今キリストを抱いて、キリストに救いを見て生きるのである。

ルカ福音書は人生の孤独の中で、この世の苦しみも悲しみもすべてを経験し、老齢の死を望み待つばかりの預言者シメオンと女預言者アンのことがキリスト誕生物語の最後に記されている。彼らは今日の一日、(1)その日を神殿で奉仕をし祈って生きること、そしてある希望を持って宮仕えをしていた。その希望とは生きている間に、「メシアに会う」ことであった。

この高齢の預言者シメオンは、正しい人で信仰の厚いという言葉から、神の戒めと定めとを落ち度なく行い、神を畏れる人であったようだ。そのシメオン、彼には聖霊が宿っていて、「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」といわれていた。彼の人生の目的は唯一つで、彼は来る日も、来る日も、救い主、幼子が顕れてイスラエルの民が救われることを待ち望んでいたの

である。すなわち、自分の人生のすべての時間を神に捧げ、救い主である幼子の現われる時を待望しながら神殿に奉仕をしていたのである。やっと彼は幼子イエスに出会い「神の救い」を見たのである。シメオンは幼子イエスを腕に抱き、神を讃えて言う。「主よ、今こそあなたは、お言葉通りこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」

シメオンは、聖霊によって、今、自分が抱きかかえているこの幼子が、救い主、メシアであることを知った時、永遠からの祝福にどんなにか感激し満たされたことでしょうか。幼子イエスを抱いて、シメオンは自分の人生を賭けて探し求めていた救い主と出会い、自分の人生の完成を知りすべてに満ち足りて感謝し、聖霊によって予言するのである。この幼子が、「万民のため」「異邦人を照らす啓示の光」であると。シメオンは一生をすべてキリストに出会うことに賭けていたから、キリストと会い「幼子を腕に抱き、神を讃え」、死を迎え入れることができた。彼はキリストの証人となったのである。彼の人生が、教会に奉仕する牧師の人生と重なって見える。人生の終末において、「あなたの救いを見た」と神の救いを見ることができ、平安と慰めが与えられる

ことを望み、シメオンや女預言者アンナのように、教会の中でいつも主と共にあって、「主イエスを腕に抱き、神を讃えて」いる者でありたい。

私たちは、教会においてキリストから慰められ、聖霊に満たされ、神のみ言葉を聞き、神の恩寵のもとにある。神の霊が宿る教会で、「あなたの救いを見た」と私たちは信仰告白をしつつ人生を歩みたい。私はキリストの体なる教会に宿っている聖霊と共に、神への讚美が行われることを大切にしたい。時の流れと言う現実の中に在って、老いが迫りくる中で聖霊に満たされて一日、一日を過ごしたい。

(牧師会開会説教要約)

マルチン・ルターへの信仰から学ぶ

齋藤造酒雄

最近読んだ2冊のルターに関する本から学びたいと思います。1冊は英文書 David M. Whitford 著: Luther: A Guide for the Perplexed

(困惑者への案内)、もう1冊は徳善義和著「マルティン・ルター」からです。英文書には「ルターによると、神は人間の知恵が理解できない方法で働く」、「法王レオ10世はルターを締め出しそれから破門する準備をしていた」、「ルターは段々と法王がこの世的な力と権威持っていたという考えに不快になっていった」、「彼の説教と聖書の壮麗な訳により、ルターは現代のドイツ語を作り出し、人々にキリスト教の新しいプロテスタント的ビジョンだけでなく、熱烈な国家主義に目覚めさせ、彼らに、少なくとも宗教において、個人的良心の至高を教えた」

(2)

徳善氏の書では、「義」なるものによって神は人間を裁くことに疑問を持ったルターが「裁きの神は同時に恵みの神でもあるのか」と悩み詩篇を研究する。31編2節で「あなたの義によって私を解放してください」にはたといきづまってしまった。そして71編に進み、全く新しい認識に到達した。この節に再び「あなたの義によって私を解放してください」と言う言葉が現われる。ルターはそれを「詩篇の記者はここでキリストを明瞭に言い表している」と捉えた。神の義とは神からの恵みであり、それ

はイエス・キリストという「贈り物」として人間に与えられるものである。ロマ書の中でパウロが「神の義は福音の中に啓示されて、信仰から信仰に至る」(1章17節)この福音こそが人間を解放し、救う。これが「十字架の神学」として知られる。

「義」とは人間に裁きを下す神の絶対的な正しさを意味するのではない。ルターが「この認識を私は修道院の塔の小部屋において得た」と言ったので「塔の体験」と呼ばれている。

(礼拝説教要約 酒田教会長老)

酒田教会訪問記

大沼 隆

東北に住みついてはや五十年。しかし、酒田という街には一度も行ったことがありませんでした。塚本先生が酒田教会に赴任されたが、主なる神さまのご計画だったのか、教区議長の深謀遠慮の賜物だったのか、はたまた酒田教会員の祈りの結果だったのか。いずれにせよ、私は酒田教会から八月

の第一主日「平和聖日」礼拝説教を依頼されて心が躍り、一日早く待望の酒田入りをしました。

その日は、連日猛暑。宮城交通高速バス「酒田行き」に乗り込み、東北道から山形高速道を西に。やがてバスは月山の中腹に入り込み深い谷間を左右に見下ろすくねくねした路を通過し、遙か鳥海山を前方にみる緑豊かな庄内の田園風景が「ようこそ、この地へ」と私を暖かく迎えてくれました。東北独特の懐かしさを漂わせる美しい景色でした。

酒田バスターミナルに出迎えて下さった塚本先生はお元氣そう。この街に何十年も住んでいるようなお顔でメイン道路に車を走らせ、先ず三居倉庫を案内して下さりました。テレビで見たとような気がするものの黒塗りの切り妻屋根が二十数棟ズラリと並び二百メートルの倉庫群にはまさに圧倒されました。ケヤキ並木も美しく、倉庫群中央の野外休憩スポットには木陰の夏の日差しから来訪者を護るかの様に白いテーブルとイスがいくつも置かれる空間があり、観光客や地元家族ずれが自由に飲み物やアイスクリームを楽しんでいます。昔、使われていた古い木製の二十メートルほど

の船が往時をしのばせてくれ、また記念館やお土産売り場も地元の特産品を並べ、旅情をたっぷり満喫できました。

私が想像していた街より酒田は活気に溢れた都市でした。生き生きと経済活動をしているビルやショッピングモール、さらにそこかしこにお寺があり、酒田教会は裏山の神社の麓に「われら、ここに在り」と言わんばかりの威風をたたえていました。

夕食は酒田が誇る魚貝類中心のフランス料理に大満足。その夜偶然ながら最上川河口で花火大会が催され、ホテルの窓から夜空に輝く色とりどりの花火を堪能してから眠りにつきました。

当日説教と聖餐式を終え、初めて会う酒田教会の方々や酒田双葉幼稚園・託児園の先生方、墓参で帰省していた方々と共に愛餐会。祝福に満ちた時を共有し、その後、奏楽者の高橋純子姉のご夫君が理事長をなさっている土門拳記念館を見学。お土産に来年のカレンダーをいただき感激しました。塚本牧師が元気に伝道牧会、地域の幼児保育事業に精力を尽くしておられる様子に安堵して帰路につきました。

(宮城学院理事)

牧師館便り

皆様お元気ですか。「葡萄の香」第3号をお送りします。今年の夏はお盆を過ぎても暑さが遠退きません。ちよつと脱水症になりかけたが、自家製生野菜果物ジュースを作り凌いでいます。酒田の暑さは予想意外。今日の気温も35度でした。冬の寒さが恋しい程です。

一つ、感謝の報告です。7月初めに、アパートから牧師館に引っ越しをしました。教会堂の改築と牧師館のリホームを120万円の予算で行いました。半額は教区の宣教共働委員会から支援して頂き、残りは教会員の献金と教会外の方々からの献金で賄いました。牧師館は、やつと電気・ガス・電話(0234・22・8060)が設置されました。牧師室のシミだらけの壁には新しいクロスが張られ、ふやけた畳は取り替えられて、ピンクのカーテンがどの窓にも付けられ、網戸も付けました。リビング・キッチンが教会員が清掃をし、流しは磨いてピカピカにしました。やつと仙台に預けておいた愛犬「のんのん」と8月から一緒に生活することになり、満たされた生活が出来るようになりました。その外にも教会堂の電気系統の直し、三階の小部屋の改

築、手すりの設置などをしました。その上、新庄本町教会から葡萄蔓が彫刻された講壇、聖餐台、花台、十字架(玄関の上の壁面に設置)を贈呈され、新庄新生教会から講壇用聖書が贈呈されて礼拝堂が木造でクラッシックではあるが、大変素晴らしい祈りの場所になりました。

二つ、8月から、酒田双葉託児園の園長に就任しました。園はこひつじ学園(新庄教会)の分校で寄附行為の変更によって、酒田教会の牧師が酒田双葉幼稚園・酒田双葉託児園の園長を就任することが望ましいということになり、私が牧師と園長を兼ねることになりました。預かり保育など、保育の必要性に応えて、先生方は朝の7時から夜の7時までの交代勤務で働いています。それに付きあい、かつての宮城学院の教頭時代と同じように教職員の指導にあたっています。一番の困難なことは、小さい園なので、家族的に行われた歴史が長く、組織や規約が曖昧であること、その曖昧さは私が最も苦手とすることで理解できない状態には頭痛がします。どうにかして、通常組織を作成しないと。早く組織が出来て誰がやってもいいように仕事を分類し、責任をもたせたい。その組織の上で働く牧師と

園長を兼任出来る人を今から探したい。三つ、私の恩師や友人、教え子が酒田教会の礼拝に奉仕されたことでした。

5月には元宮城学院女子大音楽科オルガン専攻の講師松尾泰江氏に礼拝の奏楽と献奏をしてもらいました。ついでに双葉園の先生方のオルガンの弾き方についても指導して頂きました。6月に行われた牧師就任式には、内海祥子氏の伴奏で相澤裕子氏に賛美して頂きました。8月には、私の恩師、宮城学院理事大沼隆先生に「平和聖日」の説教をして頂きました。

知らない土地に一人で遣わされて、生活することは、初めてではないのですが、それにしても酒田は遠いところ。夏は暑く冬は寒く常に風が強い。気候が厳しい。最後に、少し愚痴。この5か月間、自分で出来ることを精一杯やることはやったけど、あまりにもやる事が多くありすぎて、すっかり疲れています。御祈りを願う。

(牧師 塚本恭子)

編集後記

地方の教会は、十人に満たない礼拝で教会が維持できない現実。夏期献金は目標額の7万円にならなかつた。悩む。振込用紙は何かの時に使用して頂ければ幸い。(T)